

キャラクター名  
フォルトゥナータ・アンフォッシ

プレイヤー名

種族	ドワーフ	種族特徴	暗視、剣の加護/炎身		
生まれ	錬金戦士	性別	♀	年齢	19
冒険者Lv	11	経歴	敵対するものがある(いた)。		
経験点	5340		家族に異種族がいる。 才能を絶賛されたことがある。		

技	8	能力値	A-F	成長	他修正	能力値	ボーナス
		器用度	16	17		41	6
体	7	敏捷度	5	13		26 + 2	4
		筋力	10	11		28 + 2	5
心	5	生命力	6	16		29	4
		知力	6	2		13	2
		精神力	14	6		25	4

技能	Lv.	技能	Lv.
ファイター	11	ライダー	10
プリースト/“賢神”キルヒア	6		
マジテック	1		
スカウト	7		
エンハンサー	2		
アルケミスト	2		

戦闘特技			
タフネス	2122p		p
トレジャーハント	2120p		p
ファストアクション	2123p		p
両手利き	IB32p		p
双撃	IB30p		p
二刀流	IB30p		p
マルチアクション	IB39p		p
魔力撃	IB39p		p
防具習熟A/金属鎧	IB31p		p
			p
			p

言語	会話	読文
交易共通語	○	○
ドワーフ語	○	○
魔動機文明語	○	○

練技/呪歌/騎芸/賦術	
ビートルスキン	
キャッツアイ	
HP強化	
高所攻撃	
探索指令	
攻撃阻害	
人馬一体	
特殊能力解放	
超高所攻撃	
HP超強化	
獅子奮迅	
バランス	
パラライズミスト	
クリティカルレイ	

技能	基本 レベル	基本 命中力	基本 回避力	基本追加 ダメージ
ファイター	11	17	15	16
グラブラー	0			
フェンサー	0			
シューター	0			

鎧と盾		必要 ランク					
鎧	マナタイト製イスカエアの魔道大鎧	筋力	23	回避力	0	防護点	8
盾							
その他補正(防具習熟/回避行動 etc)							
回避技能	ファイター	合計値	15		8		

武器	用法	必要 筋力	命中 修正	命中力	C値	追加 ダメージ	威力	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
聖なる緋剣アポロ	1H	5	1	2d+ 18	10	16	50										
聖なる菊一文字	1H	3	2	2d+ 19	10	16	10										
“妖刀”紅桜	1H	10	2	2d+ 19	10	17	20										
ロングソード	1H両	13		2d+ 17	10	16	13										
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													

制限移動	通常移動	全力移動
3 m	28 m	84 m

回避	防護点
2d+ 15	8

HP
77

魔法技能	Lv.	魔力	魔法技能	Lv.	魔力
神聖魔法	6	8			
魔動機術	1	3			

魔物知識/弱点	先制力
2d+ 12/×	2d+ 11

生命抵抗	精神抵抗
2d+ 16	2d+ 16

MP
46

装備品	説明
頭 決死のハチマキ	必中されるがカウンターがクリティカルで自動命中
耳 勇者の証:技	AW:p131
顔 紅の眼鏡	
首 ポーションインジェクター	-を収納
背中 ドミネーターズマント	精神・生命抵抗+1
右手 怪力の腕輪	
腰 スローワーベルト	アウェイクポーションボール
足 黄金の拍車	騎獣の移動力に+5
その他アルケミーキット	

装備品	説明
左手 疾風の腕輪	

その他メモ	自動失敗 チェック
ゴゴゴゴゴ……。木々の間に風が吹き荒れ、轟音と共にドワーフの少女と人間の老人の髪を揺らしている。「来たか……主よ」 剣を構えた老人は、おもむろに目を閉じた。隣で汗を垂らし、手に汗を握りしめた少女は、老人の邪魔をしないように息を止めている。 聴力に集中すれば、微かなから何者かの足音と思える重低音がするの分かる。 少女は自分の足が笑っているのを必死に抑えながら、老人の顔を伺ってみると、その顔は勝ち誇った笑みを浮かべていた。 老人の眉間が微かに痙攣すると、背後の茂みからグリズリーが飛び出し、二人を襲いにかかり、爪を尖らせた。 その刹那、老人はいつの間にかグリズリーの背後で納刀をしている。 何が起きたのか理解が出来なかったグリズリーは、振り向きざまに爪を振り下ろすが、攻撃は老人を撫でる様だった。 慌てふためき、グリズリーは両手を見て目を丸くする。 既に両手の爪は綺麗に欠けており、更には自分の鼻からも切り傷が出来ており、血を一滴。 「ここは儂らの狩場じゃから、とっとと出ていくんじゃな」恐怖心に囚われたグリズリーは、まるで汗を滝の様にその場を去った。 「……さて、本当は血を出させるつもりはなかったんじゃが、手が滑った」	□□□□⑤ □□□□⑩ □□□□⑱ □□□□⑳ □□□□㉑ □□□□㉒ □□□□㉓ □□□□㉔ □□□□㉕

